九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡市方言の問い返し疑問詞疑問文(WH-echo)のピッチパターン

久保, 智之

https://doi.org/10.15017/2332587

出版情報：文學研究. 87, pp.153-179, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

福岡市方言の問い返し疑問詞疑問文（WH–echo）のピッチパターン

久　保　智　之

［内容］

0．はじめに
1．WH–question のピッチパターン
　1－1．現象の概略
　1－2．規則の定式化
2．echo WH–question のピッチパターン
　2－1．疑問詞が1個の場合
　　2－1－1．「カ」を含む場合
　　2－1－2．「カ」を含まない場合
　2－2．疑問詞が2個の場合
　2－3．疑問詞が3個の場合
　2－4．問い返しの問い返し
3．まとめ
註
参照・参考文献

0．はじめに

福岡市方言では，ダレ・ナニ等の疑問詞（WH–word）があると，そこからある一定の範囲まで，だらだらと高く平らなピッチ（声の高さ）が続く。この現象は，早田（1985, pp. 25－27）で最初に指摘され，筆者は，久保（1989）で，かなり詳細に記述した。本稿では，前稿で記述しなかった問い返し疑問文のピッチパターン[(1)]を記述する。そして，前稿で扱った現象（下の A）と合わせて，疑問詞には，それ自体のピッチ，及びそれを含む疑問詞表現が示すピッチのパターンの点から，次の2つがあることを示す（正確な記述は本文に譲る）。

A. 文末の Q［＋wh］（疑問詞を受ける形式）や，間接疑問詞疑問文（indirect

WH-question）のマーカー「カ」等のQと係り受け関係のある疑問詞

B. 問い返し疑問詞疑問文（WH-echo）に現われる，文末（最後）のQ[+wh]と係り受け関係のある疑問詞

また，本稿では，前稿で定式化した「疑問詞規則」を若干修正している。

さて，ここでいう福岡市方言とは，福岡県福岡市およびその周辺部で話されている方言であるが，分析の中心となる言語資料は，筆者自身の内省による。筆者以外のインフォーマントの言語事実については，註で触れるにとどめた。(2) なお，筆者が方言を使う環境は，かなり親しい人たちとの間だけに限られているため，例文も，男性の使う，かなりくだけたスタイルのものである。

筆者の方言のアクセント体系は，名詞のパターンは東京方言と同じで，n音節の名詞にはn＋1個の型がある。形容詞と動詞には，アクセントの対立はなく，音韻規則によって，後ろから2番目のモーラを含む音節にアクセント（⌉）が付与される。タベタ→タベ⌉タ→タ$\overline{ベ}$タ，カイタ→カイ⌉タ→$\overline{カ}$イタ，のように。ピッチ付与の規則は，東京方言と殆ど同じである。(3)

以下では，ピッチの高い部分だけを上線で示す。↗は文末の上昇調を示す。前が「高」で終われば「高」からの上昇，「低」で終われば「低」からの上昇である。例文の分かち書きは，単に読み易くするためで，音韻句境界などを示しているのではない。意味をとりにくいと思われる例文にだけ，なるべく対応するような「東京方言訳」を，〈　〉に入れて示した。*印は，その文が非文法的であることを示す。例文には，かなり不自然なものも一部含まれているが，あくまで，文法規則の検証のためである。

1．WH-questionのピッチパターン

問い返し疑問文を見る前に，まず普通の疑問詞疑問文（WH-question）のピッチパターンについて，久保（1989）の記述を，簡単にまとめてみよう。

1－1．現象の概略

まず，疑問詞（WH-word）があると，そこから文末まで平らなピッチで実現する。さらに，疑問詞のない場合は複数あった音韻句が，疑問詞があると，そこから文末まで，1つになってしまう。次の(1)は疑問詞のない場合，(2)はある場合である。

(1) オマエ　キョート　イッタトヤ↗〈きみ京都行ったのかい?〉

(2) イツ　オマエ　キョート　イッタトヤ↗〈いつきみ京都行ったんだい?〉[4]

「ト」は東京方言の「の」にあたる名詞化辞，「ヤ」は，疑問詞疑問文（WH-question）にも選択疑問文（yes/no　question）にも現われ得る（無くてもよい）文末助詞である。

次に，間接疑問詞疑問文（indirect WH-question）[5]の終わりをマークする「カ」があると，その手前で平らなピッチは終わる。「カ」よりあとの部分は，平叙文や yes/no question のピッチと違わない。

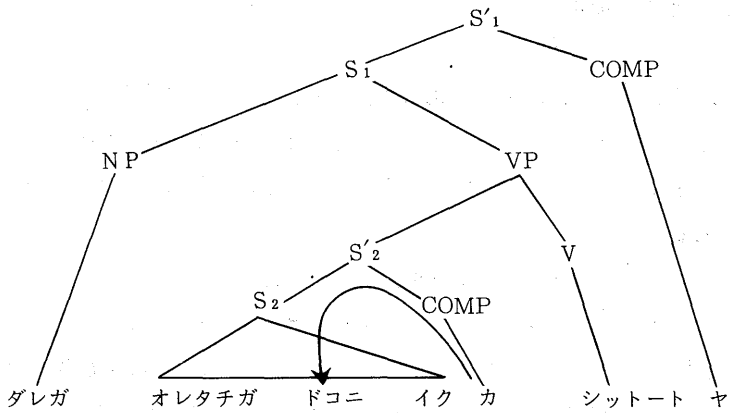
(3) イツ　キョート　イッタカ　オボエトラン〈いつ京都行ったか覚えてない〉[6]

しかし，「カ」があれば常にそこでピッチが下がるかといえば，そうではない。その「カ」も，正しく当該の疑問詞を「受ける」ものでなければならない。

(4) ダレガ　オレタチガ　ドコニイクカ　シットートヤ↗〈誰がぼくたちがどこにいくか知ってるの?〉

この例では，「ダレ」から始まった平らなピッチは，「カ」の直前ではなく，文末まで続いている。これは，「カ」が「受けて」いるのは，「ドコ」であり，「ダレ」ではないからである。この「カ」が「ドコ」を「受ける」というのを，syntactic に，「カ」が「ドコ」を c-command する，と定式化しよう。なお，c-command は以下のように定義する。

c-command：X を支配している最初の枝分かれ節点が Y を支配し，かつ X と Y のあいだに支配関係がないとき，X は Y を c-command する。



← は c-command の関係を示す

〔図1〕

(4)の c–command の関係は，［図1］のようになる。この場合，「カ」を支配している最初の枝分かれ節点は，S'_2であり，S'_2は，「ドコ」を支配している。また，「カ」と「ドコ」とのあいだには支配関係はない。よって，「カ」は「ドコ」を c–command していることになる。一方，S'_2は「ダレ」を支配してはいないから，「カ」は「ダレ」を c–command していない。

「カ」は「ドコ」を c–command しているから，前に「ダレ」がなければ，「ドコ」から始まった平らなピッチが「カ」の手前まで続くところである。次の例参照。

(5)　オレタチガ　ドコニ　イクカ　シットートヤ↗

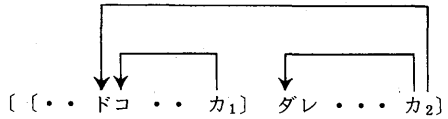
しかし，(4)では「ダレ」が前にあり，しかもこれを c–command する「カ」はないので，「ダレ」から始まった平らなピッチが，文末まで続くことになる。「ドコ…カ」のピッチは関係ない。

次の例も，この c–command で説明できる。

(6)　ダレガ　オレタチガ　ドコニイクカ　シットーカ　シットーヤ↗

〈誰がぼくたちがどこに行くか知ってるか，知ってる?〉

ここでも，外側にある「ダレ…カ」の平らなピッチが，それより内側に埋め



〔図２〕

込まれた「ドコニイクカ」の上に覆い被さっている。

しかし次のような場合，「当該の疑問詞を c–command する」という限定だけでは十分ではない。

(7) オレタチガ ドコニイクカ$_1$ ダレガ シットーカ$_2$ シットーヤ↗

c–command の関係は［図２］の通り。「カ$_2$」が c–command しているのは「ドコ」と「ダレ」の両方である。「カ$_1$」は「ドコ」だけを，「カ$_2$」は「ダレ」だけを「受けて」いる，ということを定式化するためには，平らなピッチは，疑問詞から始まって，「当該の疑問詞を c–command する最初の「カ」」の直前まで続く，とせねばならない。

前稿ではさらに，「モ」〈も〉・「デッチャ」〈…でも〉・「タッチャ」〈…ても〉・「カイナ」〈…かな〉も，「カ」と同じふるまいをすることを述べた。

１－２．規則の定式化

上のようなピッチを実現する規則であるが，平らなピッチが続くこと，さらに，複数の音韻句が１つになることから，下がり目（滝），つまりアクセント（˥）と，音韻句境界とを消去する規則が働いていると考えられる。その働く範囲であるが，まず，単独では疑問詞にもアクセントがある（全て語頭アクセント）という意識があるので[(7)]，消去規則は疑問詞から適用されるといえる。どこまでかということだが，「カ」は，(8)のように，平板の単語についた時，低いピッチで実現する。つまり前アクセントをもっていると考えられる（˥カ）。そこで消去は一見，「カ」の直前までと言えそうに見える。

(8)　トンカツカ　サカナノフライカ　ワカラン

（cf. トンカツガ，サカナノフライガ）

しかし一方，助詞「モ」は，疑問詞表現の後ろに続く場合には，(9)のように必ず「モ」で低くなるが，そうでない場合，(10)のように揺れがある。

(9)　ドノサカナモ　ウマイ

(10)　a．サカナモ　ウマイ

b．サカナモ　ウマイ

(10)では「モ」固有のアクセントに揺れがあり，(9)では疑問詞表現に関わる規則が働いていると考えられる。

また，(11)のように，「カ」のうしろにさらに助詞が続くときは，「カ」は高くなる。

(11)　ダレガ　クルカダケ　オシエチャッテン[8]〈誰が来るかだけ教えてよ〉

これも，「カ」などの助詞固有のアクセントに帰すべき現象ではなく，疑問詞表現に働く規則の存在を示すものであろう。

また，「カイナ」〈…かな〉は次の(12)のように，平板の名詞に続くとき低いので，前アクセントを持つ（⌐カイナ）と考えられるのだが，疑問詞表現に続く(13)では，「カイナ」の「カ」まで高い。

(12)　サカナカイナ〈魚かな?〉

(13)　ドノサカナカイナ〈どの魚かな?〉

(13)では，疑問詞表現に関わる規則が働いているに違いない。

以上の理由から，アクセント消去規則の適用範囲は，「カ」等を含む音韻句までであり，一旦アクセントと音韻句境界をすべて消去したあと，1つになったその音韻句の，後ろから2番目の音節にアクセントを付与する規則があると考えられる。

最後に，疑問詞が，センテンスを同じくして複数ある場合を考えよう。

(14)　ダレガ　ドコニイクカ　ワカラン

「ダレ」も「ドコ」も，ともに「カ」によってc-commandされている。しかし，「ダレ」も「ドコ」も，低く始まる。つまり，同一のセンテンス（節）内に疑問

詞が複数あったら，２番目以降の疑問詞の前では，音韻句を切り，新たに音韻句を始めねばならない。

ここまでの観察をまとめて，次のような規則を立てる。[9]

疑問詞規則（左から右に繰り返し適用）

a．疑問詞があったら，そこから始めて，文末まで，アクセントと音韻句境界を全て消せ。

b．疑問詞があって，さらにその疑問詞を c-command する，「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」，がある時には，疑問詞から始めて，それら「カ」等（複数ある場合は最初のもの）を含む音韻句の句末まで（句末の境界は含まない），アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として１つになった音韻句の，後ろから２番目の音節に，アクセントを付与せよ。

付則：同一センテンス（節）内に複数の疑問詞がある場合には，各々の疑問詞から，新たに音韻句を始めよ。

a，b ２つの規則は，その適用の環境からわかるように，非該当条件（Elsewhere Condition）により，二者択一的（disjunctive）に適用される。即ち，b が適用され得る環境では，b しか適用されず，a は適用されない。[10]

さて，冒頭で触れたように，当方言には，動詞句で終わる音韻句の，後ろから２番目のモーラを含む音節にアクセントを付与する規則がある。この規則と，疑問詞規則 b の最後の部分，「結果として１つになった音韻句の，後ろから２番目の音節に，アクセントを付与せよ。」とは，非常によく似ている。実際，この部分を，「…後ろから２番目のモーラを含む音節にアクセントを付与せよ。」としたところで，適用結果は変わらない。しかし，２つの規則を一本化することはできない。非常に一般的な規則が，派生中の異なる段階で働いている，ということだろう。[11]

2．echo WH-question のピッチパターン

ここでは，疑問詞規則に似た規則が働いていると考えられるのだが，その予

測するところとは違ったピッチパターンを見せる，問い返し疑問詞疑問文（echo WH-question＝WH-echo）について見てみよう。問い返し疑問文とは，南（1985, p. 69）によれば，次の2つの条件を満足させるものであるという（南は，「問い返し文」と呼ぶ)。

「(i) 問題の表現の直前に，相手のなんらかの発話があること。

(ii) 話し手（質問者）は，相手の，そのことばを，そのままか，それに近い形でくりかえすことによって，相手にそれを確めるものであること。」

ここでもこの定義に従っておく。

問い返し疑問文には，⒂Bのように，そう言ったか言わなかったかを相手に問う，問い返し選択疑問文（echo yes/no question）と，⒃Bのように，相手の発話中の不明部分を問う，問い返し疑問詞疑問文（echo WH-question）とがある。ここで問題とするのは，後者である。以下の例文でA：，B：等とあるものは，対話である。

⒂ A：キノー　キョート　イッタッチャン〈きのう京都行ったんだ〉

B：キノー　キョート　イッタッテ↗〈きのう京都行ったって?〉

⒃ A：キノー　キョート　イッタッチャン〈きのう京都行ったんだ〉

B：キノー　ドコイッタッテ↗〈きのうどこ行ったって?〉

2－1．疑問詞が1個の場合

2－1－1．「カ」を含まない場合

まず，次のminimal pair ⒄Bと⒅Bを見ていただきたい。⒄は，Aで自己紹介した後，Bで名前の部分を聞き返している。これに対し，⒅は，「あんた誰?」というAの問いに対し，「おまえはいま『あんた誰?』と言ったのか?」とBで聞き返しているのである。

⒄ A：オレ　クボ〈おれ久保〉

B：アンタ　ダレッテ↗〈きみ誰だって?〉

(18) A：アンタ　ダレ↗〈きみ誰(だ)?〉

B：アンタ　ダレッテ↗〈「きみ誰(だ)?」だって?〉

一見すると，(18)B は，疑問詞規則 a が適用されて，「…ダレッテ↗」というふうに，(17)B と同じピッチになるように思われるのだが，(17)B と(18)B のピッチの違いはどこに由来するのであろうか。(17)B は，「おまえはいま，自分は誰だと言ったのか?」という意味で，全体としては WH–question である。一方，(18)B は，「おまえはいま，『あんた誰?』と言ったのか?」という意味で，全体としては yes/no question であり，WH–question が直接引用文として埋め込まれている。

そこで，これらを区別して表記するために，まず，疑問文の文末には全て Q という形式があるものと仮定する。Q には，[wh] という素性について，＋か－かの指定がある。yes/no question では文末に Q[－wh] が，WH–question では，Q[＋wh] があるものとする。平叙文では文末に Q はない。Q としてどういう形式が仮定できるかを，[表 1] に示そう。

[＋wh] の Q	[－wh] の Q
ϕ（音形ゼロ）	ϕ（音形ゼロ）
カ	カドーカ
モ	
デッチャ	
タッチャ	
カイナ	

[表 1]

音形ゼロの「ϕ」は，yes/no question の文末にも，WH–question の文末にも現われる。また，「カ」は，東京方言とは違って，間接疑問文のマーカーとしてしか現われない。

Q を仮定したことに伴って，疑問詞規則 a を次のように書き改める。

疑問詞規則 a：疑問詞があったら，そこから始めて，Q[＋wh] まで，アクセントと音韻句境界を全て消せ。

さて，このQを使って，先の⒄Bと⒅Bを表わせば，

⒄B′　アンタ　ダレッテϕ[＋wh]

⒅B′　アンタ　ダレϕ[＋wh]ッテϕ[－wh]

となろう。よって，疑問詞規則aが予測する通り，⒄Bでは，平らなピッチが文末のQ[＋wh]（この場合「ϕ[＋wh]」）まで続くが，⒅Bでは，平らなピッチは文末まではいかず，「ダレ」の直後のQ[＋wh]で止まってしまうのである。ここで，「ッテ」は，平板の名詞についた時，「コレッテ↗」〈これだって?〉のように，常に低く実現するので，アクセントをもっている（ッテ）。つまり，⒅Bでピッチが下がるのは，「ッテ」固有のアクセントによる。[12]

1節で見た普通の疑問文のいくつかについて，Qに関する違い（⒆′－㉑′）を示そう。

⒆′＝(1)　オマエ　キョート　イッタトヤ↗

⒇′＝(2)　イツ　オマエ　キョート　イッタトヤ↗

㉑′＝(3)　イツ　キョート　イッタカ　オボエトラン

⒆　オマエ　キョート　イッタトヤϕ[－wh]

⒇　イツ　オマエ　キョート　イッタトヤϕ[＋wh]

㉑　イツ　キョート　イッタカ[＋wh]　オボエトラン

2－1－2.「カ」を含む場合

間接選択疑問文（indirect yes/no question）があって，その一部がわからずに問い返しをした場合，疑問詞1個を含む問い返し疑問文ができる。

㉒　A：アシタ　クルカドーカ　ワカラン〈あした来るかどうかわかんない〉

　　B：イツ　クルカドーカ　ワカランッテ↗〈いつ来るかどうかわかんないって?〉

㉒Bの文は次のように表記できる。

㉒B′　イツ　クルカドーカ[－wh]　ワカランッテϕ[＋wh]

「イツ」から始まって「ϕ[＋wh]」まで，平らなピッチになるのである。しかし，

この「カドーカ」が「カ」であったら，つまり，Q[＋wh] が文末の「ϕ[＋wh]」とのあいだにあったなら，どうなるのであろうか。以下に，間接疑問詞疑問文（indirect WH–question）の問い返し疑問詞疑問文（WH–echo）について見てみよう。つまり，疑問詞は最低２個あることになる。

２－２．疑問詞が２個ある場合

疑問詞が１個ある間接疑問詞疑問文の Wh–echo を考えてみよう。

(23) A：イマントコ　イツ　キョートイクカ　ワカラン〈いまんとこ，いつ京都行くかわかんない〉

B：イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗〈いつ，どこ行くかわかんないって?〉

(23)B を，次の(24)B の問い返し選択疑問文（yes/no echo）と比べていただきたい。

(24) A：イツ　ドコイクカ　ワカラン〈いつどこ行くかわかんない〉

B：イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗〈「いつどこ行くかわかんない」だって?〉

さて，(23)B と(24)B は，今までの表記法だと，次のようになろう。

(23)B′ イツ　ドコイクカ[＋wh]　ワカランッテϕ[＋wh]

(24)B′ イツ　ドコイクカ[＋wh]　ワカランッテϕ[－wh]

ここで(23)B′ に疑問詞規則ｂが適用されると，結果は(24)B と同じになってしまう。つまり，「カ」でピッチが下がる。(23)B のピッチは，いままでの device だけでは記述できない。疑問詞が，疑問詞規則に従わないからである。これは，基底表示の段階で，疑問詞が特別にマークされており，マークされた疑問詞があったら，そこから文末まで平らなピッチで実現させよ，つまり，疑問詞規則ｂを適用するな，という規則があると考えられよう。そこで，WH–echo の疑問詞には，基底で［＋echo］という指定がしてあると仮定し，次の規約（convention）を仮定する。

echo WH規約：

［＋echo］と指定された疑問詞には，疑問詞規則ｂは適用されない。

また，2－1－1で書き改めた疑問詞規則ａを，さらに次のように改める。

疑問詞規則ａ：疑問詞があったら，そこから始めて，最後の（一番遠くの）Q［＋wh］まで，アクセントと音韻句境界を全て消せ。

これで，(23)Bで，「カ［＋wh］」を飛び越して文末の「ϕ［＋wh］」まで平らなピッチが続くことが説明できる。「カ」があれば，疑問詞規則ｂが働いているかどうか，検証できるわけである。(23)Bは，次のように表記できる。

(23)B′ イツ　ドコ［＋echo］ イクカ［＋wh］　ワカランッテϕ［＋wh］

ここで，WH–echoの疑問詞ではない(23)Bの「イツ」には，疑問詞規則ｂが働いていることに注意しておいていただきたい。「イツ」から平らになり，本来なら「カ」で下がるところだが，「カ」の手前にあるWH–echoの疑問詞「ドコ」から始まった平らなピッチが，覆い被さっているのである。

さて，疑問詞が2つある場合には，各々について，［＋echo］の指定があるかないかの2通りの可能性があるのだから，2×2＝4通りのパターンが存在する。これを，「カ」をとる間接疑問文を例にして示そう。各々，どういう発話に対する問い返しなのかを，（　）内に示した。[13]

(25)　ダレガ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

（←ダレガ　ドコイクカ　ワカラン）

(26)　ダレガ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

（←タナカ　ドコイクカ　ワカラン）

(27)　ダレガ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

（←ダレガ　キョートイクカ　ワカラン）

(28)　ダレガ　ドコイクカドーカ　ワカランッテ↗

（←アイツ　キョートイクカドーカ　ワカラン）

これらの例の，［＋echo］及びQの指定は，次のようになっている。

(25)　ダレガ　ドコイクカ［＋wh］　ワカランッテϕ［－wh］

(26)　ダレ［＋echo］ガ　ドコイクカ［＋wh］　ワカランッテϕ［＋wh］

(27) ダレガ　ドコ[+echo]　イクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(28) ダレ[+echo]ガ　ドコ[+echo]　イクカドーカ[−wh]　ワカランッテφ[+wh]

以上のように，最後の例を除いて，3つの文は，ピッチの違いで意味が区別されているのである。

さて，ここで［+echo］という指定や「echo WH規約」を仮定する以上，2−1で見た，疑問詞1個の問い返し疑問文についても，同様のことを仮定することになる。仮定せずとも説明はできるのだが，疑問詞2個，そして3個以上の場合との整合性を考えねばならない。

2−3．疑問詞が3個ある場合

疑問詞が3つある疑問文を見てみよう。疑問詞は，各々［+echo］と指定されているかいないかの2通りだから，3つの疑問詞の指定のしかたは，8通りである。まず，ピッチパターンを示す。

(29) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(30) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(31) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(32) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(33) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(34) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(35) ダレガ　イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

(36) ダレガ　イツ　ドコイクカドーカ　ワカランッテ↗

以下に，各々の例文について，［+echo］とQに関する指定を示す。

(29′) ダレガ　イツ　ドコイクカ[+wh]　ワカランッテφ[−wh]

(30′) ダレ[+echo]ガ　イツ　ドコイクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(31′) ダレガ　イツ[+echo]　ドコイクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(32′) ダレガ　イツ　ドコ[+echo]イクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(33) ダレ[+echo]ガ　イツ[+echo]　ドコイクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(34) ダレガ　イツ[+echo]　ドコ[+echo]イクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(35) ダレ[+echo]ガ　イツ　ドコ[+echo]イクカ[+wh]　ワカランッテφ[+wh]

(36) ダレ[+echo]ガ　イツ[+echo]　ドコ[+echo]イクカドーカ[−wh]　ワカランッテφ[+wh]

さて，文頭（第1番目の疑問詞）以外では，[+echo] [+echo] という疑問詞の連続であれば，「イツドコ」というふうに，後ろの疑問詞で一旦ピッチが下がる（「疑問詞規則」の「付則」が扱う現象）が，[+echo] [−echo] という連続では，「イツドコ」と，ピッチが下がらない。[+echo] とマークされた疑問詞の平らなピッチが覆い被さるのである。しかし，文頭（第1番目）の疑問詞に関しては，この対立がなく，必ず低いピッチで始まる。そこで，指定のしかたは8通りあるのだが，実際のピッチのパターンは，それより少ない（(31)＝(33)，(32)＝(35)，(34)＝(36)）。

2－4．問い返しの問い返し

しかし，こういった「問い返し」というのは，理論上は，際限なく繰り返し得るものであろう。

A：なに?

B：おまえはいま「なに?」と言ったのか?

A（Cでもよい）：おまえはいま，「おまえはいま『なに?』と言ったのか?」と言ったのか?

……

というふうに。そこでまず，「カ」のない場合として，2−1−1で見た2つの例文(17)Aと(18)Aについて，

a．最初の発話

b．問い返し

c．問い返しの問い返し

という３つの例文を挙げる。問い返しには，yes/no echo と WH-echo がある。なお，c で現われる「ッテ↗ッテ↗」という表記では，２番目の「ッテ」の始まりのピッチは，最初の「ッテ」の始まりよりも低い。

(37) a．オレ　クボ　(affirmative)

b．アンタ　クボッテ↗　(yes/no echo)

c．アンタ　クボッテ↗ッテ↗　(yes/no echo)

(38) a．オレ　クボ　(affirmative)

b．アンタ　クボッテ↗　(yes/no echo)

c．アンタ　ダレッテッテ↗　(WH-echo)

(39) a．オレ　クボ　(affirmative)

b．アンタ　ダレッテ↗　(WH-echo)

c．アンタ　ダレッテ↗ッテ↗　(yes/no echo)

(40) a．アンタ　ダレ↗　(WH-question)

b．アンタ　ダレッテ↗　(yes/no echo)

c．アンタ　ダレッテ↗ッテ↗　(yes/no echo)

(37)－(40)は，各々次のように表記できる。

(37) a．オレ　クボ

b．アンタ　クボッテϕ[－wh]

c．アンタ　クボッテϕ[－wh]ッテϕ[－wh]

(38) a．オレ　クボ

b．アンタ　クボッテϕ[－wh]

c．アンタ　ダレ[＋echo]ッテϕ[－wh]ッテϕ[＋wh]

(39) a．オレ　クボ

b．アンタ　ダレ[＋echo]ッテϕ[＋wh]

c．アンタ　ダレ[＋echo]ッテϕ[＋wh]ッテϕ[－wh]

(40′) a．アンタ　ダレφ[＋wh]

b．アンタ　ダレφ[＋wh]ッテφ[－wh]

c．アンタ　ダレφ[＋wh]ッテφ[－wh]ッテφ[－wh]

以上12個の例文のなかで，疑問詞を1個含む問い返し疑問文は，2つある。

アンタ　ダレ[＋echo]ッテφ[＋wh]

アンタ　ダレφ[＋wh]ッテφ[－wh]

疑問詞を1個含む「問い返しの問い返し」疑問文は，以下のように3つである。

アンタ　ダレ[＋echo]ッテφ[－wh]ッテφ[＋wh]

アンタ　ダレ[＋echo]ッテφ[＋wh]ッテφ[－wh]

アンタ　ダレφ[＋wh]ッテφ[－wh]ッテφ[－wh]

これらは全て，2－1で見た例文と同様，疑問詞に［＋echo］とマークしておかないでも説明できるのだが，問い返し疑問文一般を考えれば，やはり，echo WH-word には［＋echo］とマークし，「echo WH 規約」が適用されると考えるべきであろう。

次に，「カ」を含む場合として，2－2の(23)A について，同様のことを見てみよう。

(41) a．イツ　キョートイクカ　ワカラン

b．イツ　キョートイクカ　ワカランッテ↗

c．イツ　ドコイクカ　ワカランッテッテ↗

(42) a．イツ　キョートイクカ　ワカラン

b．イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗

c．イツ　ドコイクカ　ワカランッテ↗ッテ↗

これらは，各々以下の(41′)(42′)に対応する。

(41′) a．イツ　キョートイクカ[＋wh]　ワカラン

b．イツ　キョートイクカ[＋wh]　ワカランッテφ[－wh]

c．イツ　ドコ[＋echo]　イクカ[＋wh]　ワカランッテφ[－wh]ッテφ[＋wh]

(42′) a．イツ　キョートイクカ[＋wh]　ワカラン

b．イツ　ドコ[＋echo]　イクカ[＋wh]　ワカランッテφ[＋wh]

c．イツ　ドコ[＋echo]　イクカ[＋wh]　ワカランッテφ[＋wh]ッテφ[－wh]

正しいピッチパターンを得るためには，やはり［＋echo］という指定と「echo WH 規約」が不可欠である。

3．まとめ

本稿では，疑問詞表現に，ピッチパターンの点から，次の２つがあることを示した。

A：普通の（unmarked な）疑問詞表現：疑問詞から最後の Q[＋wh] まで，または，疑問詞を c-command する「カ」等の Q があれば，疑問詞からそれら「カ」等のあたりまで（詳しくは疑問詞規則ｂを参照），平らなピッチで実現する疑問詞表現。次の例参照。

(43)　コノクルマ　ヒャクナンジュークマン　ヤッタカ　ワスレタ

〈この車，百何十万だったか忘れた〉

B：問い返し疑問文中の疑問詞表現：［＋echo］とマークされた疑問詞から，最後の Q[＋wh] まで，平らなピッチが続く。次の例参照。

(44)　ドノクルマガ　ヒャクナンジューマン　ヤッタカ　ワスレタッテ↗

〈どの車が百何十万だったか忘れただって?〉

これらのピッチの違いを実現するために，最終的には次のような規則と規約（convention）を仮定した。

疑問詞規則（左から右に繰り返し適用）

a：疑問詞があったら，そこから始めて，最後の（一番遠くの）Q[＋wh] まで，アクセントと音韻句境界を全て消せ。

b：疑問詞があって，さらにその疑問詞を c-command する，「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」，がある時には，疑問詞から始めて，それら「カ」等（複数ある場合

は最初のもの）を含む音韻句の句末まで（句末の境界は含まない），アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として1つになった音韻句の，後ろから2番目の音節に，アクセントを付与せよ。

付則：同一センテンス（節）内に複数の疑問詞がある場合には，各々の疑問詞から，新たに音韻句を始めよ。

echo WH 規約：

［＋echo］と指定された疑問詞には，疑問詞規則bは適用されない。

これらの規則と規約を仮定すれば，上の2つのピッチパターンは，2つの疑問詞のもつ，次のような違いの現われと分析できる。

疑問詞A：疑問詞規則a・bのどちらかの適用を受ける。

疑問詞B：［＋echo］と指定され，疑問詞規則bの適用を受けない。[14]

さて，この福岡市方言のように，ピッチパターンによってWH–questionとyes/no questionが区別される方言では，問い返し疑問文においても，両者の相違が如実に現われ，本質的には普通の疑問文と変わらない。[15] 問い返し疑問文も，普通の疑問文も，どちらも記述できる枠組みを，ここでは提出したつもりである。諸賢の御教示を仰ぎたい。

［註］

＊インフォーマントの方々，及びコメントを下さった方々に感謝します。

（1） 本稿でいうピッチとは，音響音声学的なものではなく，あくまで話者の意識としてのそれ，つまり，どこが高くてどこが低いと意識するか，ということである。

（2） 筆者は，1957年生まれ，男。22歳まで，福岡市城南区片江（福岡市を博多地区と福岡地区に大きく分ければ，福岡地区）に住み，以後，同早良区（福岡地区），さらに県内の嘉穂郡，粕屋郡，宗像市と転居した。

以下では，次のインフォーマントの方々について，筆者の内省と違う報告があった場合のみを，註に記すことにする。

坪内佐智世氏（A氏と略）：1967年生まれ，女。福岡市東区馬出（大きく言えば博多地区）の生え抜き。

久保謙哉氏（B氏と略）：1959年生まれ，男。福岡市城南区片江に19歳まで，

以後東京都豊島区，北区と転居。筆者の弟。

田中雅美氏（C氏と略）：1956年生まれ，男。福岡市中央区梅光園（福岡地区）に29歳まで，以後同早良区に転居。

（3） 即ち，順序づけられた以下のa・bの規則である。

a．音韻句の句頭から句中最初の有アクセント音節まで（なければ句末まで），「高」（有アクセント音節の第2モーラは「低」）とせよ。それ以降は「低」とせよ。

b．音韻句の第2モーラが「高」なら，第1モーラは「低」とせよ。

なお，「アンタ」等，一部語彙的な例外があるほか，疑問詞表現では，モーラ音素が規則的に高く実現する場合がある（註11を参照せよ）。

（4） 純粋に情報を求める疑問文ではなく，反語や，非難めいた疑問文（いわゆる修辞疑問文）の場合も，本質的には，普通の疑問文と同じに扱うことができる。但し，平らなピッチは，高い平らではなく，低い平らである。

a．イツ　オレガ　ソンナコト　ユータヤ〈いつ俺がそんなこと言った？→言ってないぞ〉

b．オマエ　ナンショートヤ〈おまえ，何やってんだ？→とんでもないことしやがる〉

c．オマエ　イツ　ワザワザ　オレガ　クローシテ　キョートカラ　カッテキタ　ヤツハシ　クッテシモータトヤ

〈おまえ，いつ，わざわざ俺が苦労して京都から買ってきた八ツ橋，食っちまったんだ？→とんでもないやつだ〉

（5） 本稿では，疑問文を疑問詞疑問文（WH-question）と選択疑問文（yes/no question）に分ける。さらに，これらが文の中に埋め込まれた場合，それぞれ間接疑問詞疑問文（マーカーは「カ」），間接選択疑問文（マーカーは「カドーカ」）と呼ぶことにする。

（6） 「ダレカキタ」，「ナンカタベタイ」，「ドッカイコーヤ」〈どこか行こうよ〉等の文中の，「ダレカ」，「ナンカ」，「ドッカ」など，いわゆる「不定疑問詞」については，そのピッチ形は，語彙的アクセントが実現したものと考え，疑問詞規則には関係ないものとする。しかし，次の例の「ダレカ」のピッチ形は，当然疑問詞規則によるものと考える。

a．（写真の中の人物を指して）コレ，ダレカ　シラン↗〈これ，誰だか知らない？〉

（7） C氏は筆者と同じ意識があるが，A氏とB氏は，はっきりしないと言う。一方，博多地区の老年層をインフォーマントとした早田（1985，p. 25）では，語頭アクセントになっている。

（8） 「カ」のあとに助詞がついた場合，音韻句がどこで切れるかによって，以下のよ

うなピッチの違いが出て来る（‖は音韻句境界）。

a．‖ダレガ　クルカダケ‖　オシエチャッテン

b．‖ダレガ　クルカ　‖ダケ‖　オシエチャッテン（ダ⌐ケ）

bで「ダケ」の独立性が弱まれば，次のようなピッチも出て来る。

c．‖ダレガ　クルカ‖ダケ‖　オシエチャッテン

（9）この規則は，前稿と若干異なっている。前稿では，次のような規則を立てた。

疑問詞規則（左から右に繰り返し適用）

a．疑問詞があったら，そこから始めて，文末，またはセンテンスを同じくする疑問詞の直前（直前の音韻句境界は含まない）まで，アクセントと音韻句境界を全て消せ。

b．疑問詞があって，さらにその疑問詞をc-commandする，「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」，がある時には，疑問詞から始めて，それら「カ」，「モ」等（複数ある場合は最初のもの）を含む音韻句の句末まで（句末の境界は含まない），アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として1つになった音韻句の，後ろから2番目の音節に，アクセントを付与せよ。

しかし，この規則では，実は前稿中の次の文の正しいピッチが予測出来ない。

(21)（前稿の番号）ダレガ　ドコニ　イクカ　ワカラン

この文は，上の疑問詞規則のaの適用環境にもbのそれにも該当するので，bしか適用されないことになり，同一センテンス（節）中に複数の疑問詞があるこの文の正しいピッチは出て来ない。これを解決するために，本稿では，上のaの規則から同一センテンス（節）中の複数の疑問詞に関する部分を削除し，付則として付け加えた。

(10) ここでは，以下のKiparsky（1982, p. 136）の定義に従う。

Rules A, B in the same component apply disjunctively to a form ϕ if and only if

(i) The structural description of A (the special rule) properly includes the structural description of B (the general rule)

(ii) The result of applying A to ϕ is distinct from the result of applying B to ϕ

In that case, A is applied first, and if it takes effect, then B is not applied.

疑問詞規則a，bは，bの方がspecialであり，その構造記述（structural description）「疑問詞があって，さらに…がある時は」は，aの構造記述「疑問詞があったら」を完全に中に含んでいる。また，aとbの適用の結果は異なる（例えば，「カイナ」で終わる文にaが適用されると，文末まで平らなピッチにな

る)。

(11) 当方言では，モーラ音素（M）を含む長音節があるとき，たとえば，「$\overline{\text{CV}}$MCV」と「$\overline{\text{CVM}}$CV」との対立はなく，一般に，モーラ音素は低く実現する。カイ┐タ→$\overline{\text{カ}}$イタ，のように。ごく少数「$\overline{\text{アン}}$タ」等の例外はあるが，これらは語彙的にマークされていると考えられる。しかし，疑問詞規則が絡む場合，次に示すように，モーラ音素まで高いピッチで実現する場合がごく普通にある。

疑問詞規則bは，後ろから2番目の音節にアクセントを付与する。その2番目の音節が，モーラ音素を含む長音節である場合，そのモーラ音素までピッチが高い場合（下のa•c）と，モーラ音素でピッチが下がる場合（下のe）がある。

a．ドコノ　レストラン┐カ　ワ$\overline{\text{カラ}}$ン〈どこのレストランかわかんない〉

＊b．ドコノ　レストラン┐カ　ワ$\overline{\text{カラ}}$ン

c．イクラノ　カイ┐カ　シッ$\overline{\text{トー}}$↗〈いくらの貝か知ってる?〉

＊d．イクラノ　カイ┐カ　シッ$\overline{\text{トー}}$↗

(cf. $\overline{\text{レ}}$ストランガ，$\overline{\text{カ}}$イガ)

これらの例では，「レストラン#┐カ」「カイ#┐カ」のように，モーラ音素と「カ」の間に，単語境界がある。

一方，次のように，「カイナ」で終わる音韻句では，後ろから2番目の音節「カイ」にアクセントが付与された場合，モーラ音素「イ」は，aやcと違って，低いピッチで実現する。

e．ドコノヒト$\overline{\text{カイ}}$ナ〈どこの人かな?〉

＊f．ドコノヒトカイナ

この場合，「カイナ」は，単語境界を含んでいないから，「$\overline{\text{カ}}$イタ」等と同じく，モーラ音素で下がると考えられる。つまり，少なくとも共時的には，「カイ#ナ」と分析することはできないのである。

これと似た現象は，「アクセントの担い手」に関連して，上野（1984）や早田（1989）でも指摘されている。上野（1984，p.52）では，東京方言で，

g．イ$\overline{\text{トー}}$シ〈伊東市〉

h．イ$\overline{\text{トー}}$シ〈伊東氏〉

の区別があるとしており，モーラがアクセントの担い手であるとする根拠の一つとしている。一方，早田（1989，p.40）は，gもhもどちらも「イ$\overline{\text{トー}}$シ」と言うような気がすると述べ，東京方言では，「$\overline{\text{○：○}}$」というピッチパターンが，「平板名詞＋前アクセント語」という連続で現われるようだとしている。

(12) 当方言では，「ン」で終わる形式に引用の補文標識「ッテ」が続いた場合，「ッテ」が「テ」で現われ得るのだが，この現象は，「…ン」と「ッテ」のあいだに，音形ゼロのQである「ϕ」があるか否かに関わっている（老年層，及び博多地区の若年層（本稿のインフォーマントの中ではA氏）にあっては，そもそも「ッテ」

を全く使わず，「テ」だけを使うため，この議論は成り立たない)。

まず，「レストラン」を例にとり，「ン」と「ッテ」の間に「ϕ」がない場合を考えてみよう。a・bでは「ϕ [−wh]」が，c・dでは「ϕ [+wh]」が文末にある。

a．コノレストランッテ↗〈このレストランだって?〉

b．コノレストランテ↗〈　〃　〉

c．ドノレストランッテ↗〈どのレストランだって?〉

d．ドノレストランテ↗〈　〃　〉

では，「ϕ [−wh]」が，文末以外に，「ッテ」の前にもある場合はどうだろうか。

e．コノレストラン↗ッテ↗〈「このレストラン?」だって?〉

＊f．コノレストラン↗テ↗〈　〃　〉

fが示すように，「…ン」と「ッテ」のあいだに「ϕ [−wh]」がある場合には，「ッテ」は「テ」にならない。次のように，あいだに「ϕ [+wh]」がある場合でも同じである。

g．ドノレストラン↗ッテ↗〈「どのレストラン?」だって?〉

＊h．ドノレストラン↗テ↗〈　〃　〉

次に，「ナンボン」〈何本〉を例に，「ϕ [+wh]」が文末にある例（i，j）と「ナンボン」と「ッテ」のあいだにある例（k，l）を見てみよう。

i，ナンボンッテ↗〈何本だって?〉

j．ナンボンテ↗〈　〃　〉

k．ナンボンッテ↗〈「何本?」だって?〉

＊l．ナンボンテ↗〈　〃　〉

この場合も，やはり「…ン」と「ッテ」のあいだに「ϕ [+wh]」があると，「テ」にはならない。

さて，「ナニ」の場合は，pのように，予想どおり「ナンテ↗」が不可であるほか，mの「ナンッテ↗」も許されないが，後者は，「ナニ（ナン)」の語彙的な特性だと考えられる。

＊m．ナンッテ↗〈何だって?〉

n．ナンテ↗〈　〃　〉

o．ナンッテ↗〈「何?」だって?〉

＊p．ナンテ↗〈　〃　〉

ちなみに，「テ」しか使わないA氏では，f，h，l，pは全て文法的である。

(13) 以下かなり複雑な文が出て来るが，疑問詞が3個になったり，「問い返しの問い返し」になると，かなり不自然であろう。しかし少なくともA氏については，複雑な文に関しても，ピッチについて筆者と同じ直観がある。

(14) 現われる環境にかなり制限があるようだが，疑問詞規則が全く適用されていな

いと考えられる疑問詞表現がある。次の例文中波線の，「ナンジューマン」のようなものである。

a．A：コレ　タカイッチャロー↗〈これ，高いんだろう?〉

B：ウン。ナンジューマンテスルヨ↗〈うん。何十万ってするよ〉

A：エー↗　ナンジューマン↗〈えー?! 何十万だって?〉

b．A：コレ　イクラカイナ。ナンジューマンカイナ〈これ，いくらかなあ。何十万かなあ〉

B：ソンナニセンクサ。ゴマングライヤナイト↗〈そんなにしないさ。5万ぐらいじゃない?〉

上の波線部分には，疑問詞規則は働いていない。そこで，こういった疑問詞を仮に，free WH-word と呼んでおこう。これは，次のような，疑問詞規則の適用されている「普通の」疑問詞表現とは異なる。

c．コレ　ナンジューマン↗〈これ，何十万?（何十万か知りたい）〉

d．コレ　ナンジューマンカイナ〈これ，何十万かな?（何十万か知りたい）〉

ここでは，「ナンジューマン」と「ナンジューマン」，「ナンジューマンカイナ」と「ナンジューマンカイナ」が，ピッチの上で対立しているのである。「ナンジューマン」と「ナンジューマン↗」では，上で見たように，意味も違う。後者は疑問詞疑問文（WH-question）であり，答えとして，「50万」とか，「80万」とかの具体的な数字を求めているのだが，前者は，疑問文ではない。平叙文である。「50万」等の具体的な数字は示さず，ただ10万円から90万円の間であることを言っているのである（10万円や20万円である可能性は，あまりないかもしれない）。「不定表現」とでも言えようか。こういう意味の「ナンジューマン」と意味的に対立するのは，「ナンマン」や「ナンビャクマン」である。

一般に，「なに」に対する「なにか」，「だれ」に対する「だれか」等を指して「不定表現」とか，「不定代名詞」などと言われる。当方言でも，そういった「疑問詞＋カ」という表現は，同じように使われる（註6参照）。しかし，ここでいう「ナンジューマン」等の「不定表現」と，「ナンジューマンカ」等の表現は，確かに似た意味を表わしてはいても，次のように，やはり違っているのである。

e．ナンビャクマンノ　オーダイニ　ノッタ〈何百万の大台にのった〉

f．ナンビャクマンカノ　オーダイニ　ノッタ〈何百万かの大台にのった〉

eは，十万の桁から百万の桁になったこととほぼ同じ意味だが，fは，それと同じことも表わせはするが，例えば4百万代から5百万代になった場合にも使えよう。つまり，「ナンビャクマン」は「ナンジューマン」や「ナンゼンマン」と

の対立に注目した表現であり，「ナンビャクマンカ」は，それ以外に，百万代のなかでの対立に注目している場合もある，と言える。

この「ナンジューマン」等には，疑問詞規則は働いていない。疑問詞規則が適用されれば，「ナンジューマン」となるはずである。「ナニ」のアクセントを，ここでは「ナ¬ニ」としておくが，どういうアクセントの単語であれ，全て「○○○ジューマン」となる。例えば，「ロク¬」→「ロクジューマン」，「ナ¬ナ」→「ナナジューマン」のように。つまり，疑問詞規則は適用されず，「ナニ」の基底のアクセントは，複合語形成で消去されたものと考えられる。疑問詞疑問文ではないのだから，文末に「Q[＋wh]」などなく，疑問詞規則が働かないのは当然のように見える。確かに，以下のｇの３つの文は，各々ｇ′のように仮定すれば説明できるであろう。

ｇ．ａ．ナンジューマン〈何十万〉(free WH-word)
　　ｂ．ナンジューマン↗〈「何十万」だって?〉
　　ｃ．ナンジューマン↗〈何十万?〉
ｇ′．ａ．ナンジューマン
　　ｂ．ナンジューマンϕ[－wh]
　　ｃ．ナンジューマンϕ[＋wh]

しかし，free WH-word が，普通の WH-word と共起した場合は，両者とも文末の Q[＋wh] によって，疑問詞規則の適用を受けることになってしまう。次の例文ｈでは，「ダレ」も「ナンビャクマン」も普通の WH-word であり，ｉでは，「ダレ」が WH-word，「ナンビャクマン」が free WH-word である。

ｈ．ダレガ　ナンビャクマンノ　クルマ　カッタト↗
ｉ．ダレガ　ナンビャクマンノ　クルマ　カッタト↗

しかし，これら２つの文は，今までの表記法だと，次のように同じになってしまう。

ｊ．ダレガ　ナンビャクマンノ　クルマ　カッタトϕ[＋wh]

ｈとｉを区別するためには，free WH-word の方に，基底で特別なマークを付けておくしかないであろう。仮に，[＋free] とマークすることにし，次の規約 (convention) を仮定する。

free WH 規約：

[＋free] と指定された疑問詞には，疑問詞規則は適用されない。

しかし，この free WH-word の出現はかなり制限があり，どこまで一般的なものとして記述していいのか，まだよくわからない。

(15) 日本語諸方言の中で，yes/no question と WH-question を何らかの形式で区別する方言については，福井 (1988) に，自身の母方言である岐阜県萩原町方言に関する記述のほか，いくつかの方言について，簡単な紹介がある。

諸言語の問い返し疑問文に関する研究には，安達（1989），南（1985），Comrie（1984），Janda（1985），McCawley（1987）等がある。

［参照・参考文献］

安達　太郎（1989）「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』（明治書院）第8巻第8号，pp. 30－40。

上野　善道（1984）「地方アクセントの研究のために」 加藤正信編『新しい方言研究』（明治書院）所収，pp. 47－64。

久保　智之（1989）「福岡市方言の，ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』第156集，左 pp. 1－12。

早田　輝洋（1985）『博多方言のアクセント・形態論』 九州大学出版会。

早田　輝洋（1989）「アクセント」 講座日本語と日本語教育・第1巻『日本語学要説』（明治書院）所収，pp. 28－48。

福井　玲（1988）「疑問文の体系とその特徴について」『日本方言研究会・第47回研究発表会・発表原稿集』，pp. 47－55。

南　不二男（1985）「質問文の構造」 朝倉日本語新講座4『文法と意味II』（朝倉書店）所収，pp. 39－74。

Comrie, Bernard (1984) Interrogativity in Russian. In W. S. Chisholm Jr., ed., *Interrogativity*, pp. 7－46., Amsterdam: John Benjamin.

Janda, Richard D. (1985) Echo-questions are evidence for what? In William H. Eifort et al., eds., *Papers from the General Session at the 21-st Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society (CLS 21 part 1)*, pp. 171－188. Chicago Linguistic Society, University of Chicago.

Kiparsky, Paul (1982) From cyclic phonology to lexical phonology. In Harry van der Hulst and Norval Smith, eds., *The structure of phonological representations (Part I)*, pp. 131－175. Dordrecht: Foris.

McCawley, James D. (1987) The syntax of English echoes. In Need, B. et al., eds., *CLS 23 part 1*, pp. 246－258.

［付　記］

本稿及び久保（1989）の中に出て来る，全ての例文を収録したカセットテープを作成した（録音時間約25分）。ダビング御希望の方は，カセットテープ（46分）と，宛名を明記し切手を貼った返信用封筒を同封して，「〒812　福岡市東区箱崎6－19－1　九州大学文学部言語学研究室　久保智之」宛，お申し込みいただきたい。

The Pitch Patterns of WH-echo Sentences in the Fukuoka City Dialect of Japanese

Tomoyuki KUBO

In the Fukuoka City dialect of Japanese, unmarked WH-words are subject to the disjuntive "WH-word rules" (a) and (b).

WH-word Rules

(a) Delete all the accents (¬) and the phonological phrase boundaries from WH-word to the last Q[+wh], where Q stands for an interrogative marker.

(b) If there is an occurrence of one of the five Q[+wh] particles, i.e. *ka, mo, detcha, tatcha, kaina,* which c-command the WH-word, then delete all of the accents and the phonological phrase boundaries from the WH-word to the particle, and then reassign an accent to the penultimate syllable of the new phonological phrase.

On the other hand, WH-words in WH-echoes are underlyingly marked as [+echo], and subject to the rule (a) only. Below are examples of an unmarked WH-question (1) and an echo WH-question (2), where the line stands for a high pitch and ↗ for a rising pitch.

(1) Anta itu Kyooto itta↗
you when Kyoto went
"When did you go to Kyoto?"

(2) (dialogue)
A : Itu Kyooto itta-ka wasureta.
when Kyoto went-Q forgot
"I forgot when I went to Kyoto"

B：Itu doko itta–ka wasureta–tte↗

when where went–Q forgot–you say？

"You forgot when you went WHERE？"

In (1), *itu* is subject to the rule (a). In (2), both *itu*'s are subject to the rule (b), while *doko* is subject to the rule (a) on account of the specification [+echo], as the following representations show.

(1′) Anta itu Kyooto ittaφ[+wh]

(2)A′ Itu Kyooto ittaka[+wh] wasureta

(2)B′ Itu doko[+echo] ittaka[+wh] wasuretatteφ[+wh]

[校正に際しての付記] 新しいデータを加えた本稿の補編を，『九大言語学研究室報告』第11号（九州大学文学部，1990年3月）に掲載した。合わせ参照願えれば幸いである。